第4分科会

第2分散会

Ⅰ.はじめに

分科会基調提案では、「人権確立をめざすまちづくりの推進」、すなわち「部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざすまちづくりをどうすすめているか」を討議の柱として、4つの実践報告をもとに論議を深めていきます。人権確立をめざすまちづくりとは、地域の中での人権確立をめざすネットワークづくりであり、ひとりもとりこぼさない居場所づくり・まちづくりであることを確かめながら交流・討議を深めていきましょう。

Ⅱ　報告及び質疑討論の概要

－報告1－⑤

ワイワイキャンプが教えてくれたこと（佐賀県同教）

トッテントン♪。（太鼓の音）生まれた場所や育った場所、住んでいた場所で人の値打ちに差をつける部落差別が21世紀にしてもなお最も深刻にして重大な社会問題のままになっている。一刻も早く無くさなくてはならない。

私が噂の佐賀県同教所属、隣保事業司の伴康之です。まずは地区の概要について、約40世帯、70人で1つの自治会を形成。準農村地帯の中央部にあるが農業従事者はいない。大半の世帯が同和対策事業で建設された市営住宅に入居している。隣保館と児童センターも地区内にあり、1階が隣保館、2階が児童センターで、隣保館では人権啓発地域交流事業と地域福祉事業に軸足を置いた『福祉と人権のまちづくり』に取り組んでいる。「ふつうにくらすしあわせ」頭文字を取って『ふくし』。この福祉を妨げる生活課題が人権問題であり、それを丁寧に解決することが福祉の向上につながる。即ち、福祉と人権は1つという訳だ。

児童センターは、半世紀にわたり放課後児童クラブや学童保育の役割を果たす地域に欠かせない子育て支援施設。地区を取り巻く小学校区は、昭和の大合併の前の旧村役場時代の町割りで、つながりが強く、約850世帯、2000人が暮らしており、12の自治体で構成されている。

ワイワイキャンプは夏休みに地区内の公園で行う、小学生を対象とした1泊2日の野外教育キャンプである。1995年にスタートして今年で29年目、26回を数えた。地域の保育園が行っていた「お泊り保育」の廃止を惜しむ保護者の要望に応える形で児童センターが取り組みを始めて、3年目から隣保館が引き継いだ。当時は地対協意見具申により、隣保館運営についても地域に開かれたコミュニティセンターとしての活動展開を求められた時期であり、ワイワイキャンプについても対象児童を小学校区全体に広げ、小学校区の青少年健全育成事業に位置付けて地区外の各種団体と連携を深め、人権啓発地域綱領卯事業としての展開を目指した。

ワイワイキャンプはあえて低学年児童を対象にしている。小さな子どもには親が付いて来るということから、地区内の公園に地区内外の大人を集めて子どもと一緒に交流促進を図ろうという、伊万里市隣保館長の「逆転の発想」によるものだ。企画運営についても、隣保館・児童センター・支部を中心に、子どもを取り巻く地区内外の各種団体で実行委員会を組織し、青少年育成団体の協力を得ながら、学校・家庭・地域が一体となって取り組んでいる。

ワイワイキャンプには2つの願いが込められている。1つめは、地区内外の地域交流の促進。2つめは、自尊心と思いやりの気持ちを持った子どもの育成。地区内のふれあい公園をキャンプ村にして、夏休み最初の週末に行う。今年はコロナ禍の影響で4年ぶりに、また、熱中症対策のため隣保館・児童センターで屋内実施とした。児童13人、大人69人の参加があった。（今年度キャンプの様子のショートムービー上映）

子どもを囲んで学校・家庭・地域がつながることで『あたたかい時間』を共有することができ、『あたたかい時間』は人権意識を育む「漢方薬」になっている。隣保館、児童センター、支部は、子どもを見守る3つのまなざし（学校・家庭・地域）をつなぐ『だんごの串』。『秘伝のタレ』は、継続することで熟成した確かな「つながり」。ワイワイキャンプは、部落差別を無くすための『じんけん印のだんご三兄弟』なのだ。

－主な質疑と意見－

三重　ワイワイキャンプで育まれたつながりを生かせる場はあるのか。キャンプを続けることで、地区外の人たちの部落問題に対する認識はどのように変わって来たか。

報告者　小学校区単位のまちづくりの取り組みの1つにキャンプがあるのではないかと思っている。

佐賀　夜の懇親会の参加者から、「自分の子どもも参加させたい」との声を聞いた。親世代の参加により、新たなつながりが生まれている。

佐賀　キャンプの委員の1人から「地区外の自分も隣保館に入ってもいいんだろうか」との質問を受けた。「いつでも来てください」と答えた。29年前と比べたら、部落問題に対する認識が良い方に変わってきている。

三重　今、学校同和教育と社会同和教育が分断されていると感じる。子どもたちが学校に持ち込む課題に対して、学校、保護者、地域が取り組むことでつながりが生まれ、それが進化していくのが社会教育。近頃は事業という形の名になっていて、人の顔が見えない。

兵庫　継続が困難になった時や開催が危ぶまれた時にはどのようにしてきたのか。エピソードがあれば紹介してほしい。

報告者　別の分野のキャンプで大きな事故が発生した時は、ワイワイキャンプを開催するかどうか悩んだ。しかし、これまで以上に安全対策を徹底の上実施した。コロナ禍では実施を3回見合わせたが、実行委員会は中断することなく開催した。

―報告2－⑥

未来につながるしまづくり（香川県同教）

直島町は、瀬戸内海の離島で、香川県と岡山県の県境に位置し、県の重要無形文化財に指定された直島女文楽をはじめ、貴重な文化財が残っている。1989年以降の観光開発の企業誘致により、4つの美術館と「家プロジェクト」と呼ばれる、古民家を整備した地域とアートのコラボレーション施設が創られるなど、文化性の高い島として注目され、世界各地から観光客の往来が見られる。

一方、1960年頃には8千人近かった人口が、現在では2941人と、少子高齢化と過疎化が進み、「直島町差別を無くし人権を擁護する条例」の目的にある「人権擁護の高揚を図り、もって平和な明るい地域社会の実現」のためには、「行政の責任とともに町民一人ひとりの自覚と協力」が必要とされ、学校教育や観光客を受け入れる活動、移住者との交流や深まりが重要とされている。

島の子どもたちは高校生になると、進学のために島を出る。三宅親連元町長は在職中、島から旅立つ子どもたちが、外の世界で委縮することが無いようにしたいと考え、文教地区構想を掲げて、幼児学園、・小学校・中学校を新たに島の中心部にまとめて整備し、島の子どもたちをまち全体で見守り、幼小中の全教職員とともに育てていく幼小中一貫教育を全国に先駆けて1976年から行ってきた。

子どもが幼小中の12年間をほぼ固定の学級集団で過ごすことは、 互いに認め合い、安心できる人間関係が育っていく一方で、各学年1クラスのため、いじめや差別を生み出す土壌にもなると考えられる。そこで、任期2、3年で頻繁に入れ替わる教職員同士も積極的に交流し、連携を密にすることで、子ども・教職員・保護者の人間関係が深まりを進め、いじめの早期発見にもつなげている。

直島町では1988年から ALT（外国語指導助手）を導入し、幼小中一貫教育のなかで英語教育を積極的に支援してきた。「Meet the World」という小中合同で行う国際交流の授業では、県内の学校に派遣された ALT20名程を迎え、英会話やゲームをして触れ合い、町内を歩いて英語でアート作品やまちの歴史を案内する活動をしている。子どもたちは、こうした活動を通して自分を積極的に表出することの楽しさを実感しながら、海外からの来島者を自然に受け入れることができている。

海外からの来島者に、英語でボランティアガイドをする直島 EGG（Naoshima English Guide Group）活動は、直島に誇りを持ち、直島から世界に発信できる国際感覚を持った子どもの育成を目標としており、アート施設のガイド活動や、直島や学校のことについて紹介する活動を行っている。スタッフは社会教育担当と ALT、地域のボランティアで構成され、ガイドメンバーは小・中学生を中心に20名程で構成し、卒業した高校生の参加もある。

2015年から国際交流推進協議会が発足し、役場職員を対象に「おもてなし English」事業として、観光客への対応に向けた英語研修を行っている。道を訊ねて来庁する観光客に対して英語で案内を行うためのサイン表示を役場内の窓口に設置し、町広報誌上に観光案内用の英語表現コーナーを設けた。この取り組みは町職員からの要望で始まり、町民と外国からの来島者の簡便なコミュニケーションツールとして役立っており、温かく人を迎えようとする意識の広がりも生まれている。

直島では、町内唯一の公民館が町民の活動・交流の場だけに留まらず、多文化交流を促すダイバーシティ・インクルージョンの場となっている。2020年度は「郷土料理講座」を4回行った。1回目は地元の主婦が、若い世代や移住者に郷土料理を伝え、2回目以降は海外からの移住者が自分たちの国の郷土料理を伝え、参加者からは「違う文化を知ることができて楽しかった」と好評を得た。

直島では、島の真ん中に子どもたちを集め、将来、世界のどこへ行っても自信をもって活動できる人物になってほしいという願いをもって、地域全体で学校教育に取り組んできた。海外からの観光客と交流する機会の中で、多様性を理解する素地も醸成されてきた。積極的に観光客に話しかける町民も多くなった。幼い頃から外国人教師と接する機会をもち、自己表出に抵抗感のない子どもたちが育っている。ふるさとに誇りを持った子どもたちは、多様性を受容できる人権意識の高い大人に育つと考えている。

－主な質疑と意見

兵庫　幼小中一貫校の利点と課題について聞きたい。また、人権感覚を育むうえで行っていることがあれば教えてほしい。

報告者　直島町では、あらためて島の中心部に幼小中学校を移設して、町民全体の教育文化の拠点化を図った。教職員、保護者、子ども全体を島民全体で育てることができている。また、日常を共にしており、「あの家は・・・こうだ」といったような互いの家の動向を周知している感覚や人間関係の固定化といった課題はあると感じている。

三重　1つの小学校から1つの中学校に進学する中で、保護者の温かい人間関係づくりにためにしていることがあれば教えてほしい。
鹿児島　喜界島から参加している。離島なので小中一貫校が多くある。町内単位のような小さな地区に分かれるのではなく、島全体で子どもを育てていこうという意識作りをしている。学校行事に保護者だけではなく、ふつうに地域住民が参加する。参加できるような仕組みを意識的に作らないことには、地域住民の参加は実現しないと思って取り組んでいる。
報告者　中学校の人権弁論大会には、保護者だけではなく地域住民も参加している。「幼かったあの子がこんなことを考えて、大勢の前で発表するように成長したんだ」といった感想を聞いている。幼稚園児79人、小学児童116人、中学生徒65人。1学年1学級約20名で、1人の担任が学級の全員を見ている。教職員同士の連携が無ければ見ていくことはできない。
香川　令和5年4月に直島中学校に赴任した。直島では年に5回『幼少中合同研修会』があり、教職員全員が参加する。探究活動については幼児学級から小中へとつなげて発展させている。避難訓練も幼小中合同で実施している。教職員皆が地域行事にも参加している。担任をしている1年学級の生徒は20人。先日、クラスの約半数が関わるLINEトラブルが発生した。生徒からの聴き取りでは、「LINEで仲間はずれにされるのが怖い」「仲間外れにされたら生きていけない」との声があった。保護者からの報告で早期に知ることができ、生徒への対応ができた。日頃からの保護者と学校のつながりがあったからだと思っている。
香川　元直島小中一貫校校長。直島では、教職員が2、3年で入れ替わるといった環境にある。また、島内の固定した人間関係の中では、一度もめると島に居れなくなるといった危険もはらんでいる。そういった中、子ども達が自尊感情を高めて誇りを持って社会に出て行けるようにとの目的をもって一貫校にした。その際、全職員で子どもたちに関わろうと決めた。
兵庫　直島では、 2010年から瀬戸内国際芸術祭が3年に一度開催されている。その後の変化について分かる範囲で教えてほしい。
報告者　島のあちこちに作品が置かれているので、島民に聞かないと場所が分かりにくい。地域住民巻き込み型になっている。近年、レンタサイクルを設置したり、美術館に併設しているホテルや民泊もできたりしている。
兵庫　直島ではどのようにして人口減対策をしているのか。
報告者　直島町では増えも減りもしていない状況。美術館関係の仕事が増えていて、島外から移り住む人たちもいる。

―1日目総括討議

鳥取　全国からの参加者が居られると聞いている。会場の皆さんに、学校教育と社会教育の連携について、皆さんが関わっておられる状況について聞きたい。
三重　学校同和教育と社会同和教育の分断についてはどちらにも責任があると思う。人権啓発に100点は無いと先輩たちに言われ続けて来た。答えがなかなか見つからない。学校同和教育に関わって来た子どもたちが卒業して社会同和教育の範疇に入ってくる。学校はいったいどこで手を切っているのか。行政は、学校はちゃんとしてくれているんやろうなと思ったような顔をして、社会同和教育の部分で「おいでおいで」をしている。そこに連動性が無い。これは、学校だけ行政だけの責任ではない。今までそういう感覚が無かったのだと思う。決して「だんご三兄弟」ではない。我々は、これまで切磋琢磨してやってきた。これからも是々非々でやっていくしかない。昨年度の全同教で、四男の中学2年時の担任で中学3年時に地区学習会の担当をしてくれた先生が実践発表をした。発表の最後に「この差別を無くすのは私や」と全国から来た人たちの前で発言した。クラスの中に三者三様の部落差別の現実がある。見て見ぬ振りは許されない。教師として自分の問題として、この子らとずっと関わっていくという宣言だと思い、支えてやらんなあかんと思った。この問題に「ぶ抜き、さ抜きは無い」強い思いを持って、学校と地域と運動と自分自身をどうつなげていくのか。時には、「その先の子どものことをどう考えているの？先生」といったような言葉を学校にぶつけて、時には叩き合ったりしながら、そうして取り組む大人たちの姿を子どもたちに姿を見せながら今も活動している。
協力者　差別はする側の問題というところだと思う。自分も学校教員なので、子どもたちが大きくなって、学校が関われないようになった時に、社会教育の中で、子どもたちがどんな風につながっていくのかというところが見えているのかと問われている。自分としては正直見えていなかった。「その子どもらのことをどう思っているの、先生」と突き付けられている気がする。結果として起こってしまっている、学校同和教育と社会同和教育の分断に対して、うちのところではこんな風にやっているという実践を会場から出してほしい。
佐賀　社学連携を意識している。同和教育指導員として5年目。その前は「ワイワイキャンプ」で登場した児童センターの職員をしていた。今は、同和問題との出会い直しをしてもらおうという気持ちで地区巡回講座を開催している。「今学校では同和問題についてこんな風に勉強しているんですよ」と紹介すると、参加者から「知らんやった」と言われることがある。
　児童センターの職員をしていた時に部落差別に出会い、知らないままではいけない、自分なりに向き合っていくべき問題だと思った。難しい話ではなくて、楽しく正しく「なんか面白いね」と言ってもら

えるような啓発をしていきたいと思って続けてきたら、巡回講座の参加者から「待っとったよ」と声を掛けられるようになった。蒔いてきた種が育ってきたと感じている。

人権は特別なものではなく身近なもの。大人たちが、家庭の中ででも子どもたちから教えてもらうという気持ちでやっていけたら良いと思う。地域には先生も住んでいるはずなのに、地域巡回講座に先生の参加が無い。先生と一緒に講座ができれば、社学連携が深まるのではないかと思っている。

協力者　「先生らと一緒にやっていきたいで」という学校の教員に対するエールだと思って聞いた。

三重　法が切れた頃、校区に地区のある学校に赴任した。それまで教育集会所では解放学習会をしていた。でも、先生達が、「法が切れたから、これで差別は無くなった」と言って、キャンプや夏祭りを開催して子ども達の参加を広めていくような活動に変えていった。学校でも部落問題学習よりも人権学習というようなことをしていた。15年後、自分が母親になってから、指導主事として戻り、教育集会所キャンプに参加した時、教え子から「先生から部落差別について聞いたことが無い。先生は、オブラートに包んで私たちに渡してきたやろ。だから何にも解決してへんで。もう一回勉強したいわ」と言われた。周りの先生は、「それを言わせた先生はすごいな」と言ってくれたけれど、自分では「遅いわ」と思った。教え子の言葉を聞いて、差別は無くしていかんなあかんと思った。『ワイワイキャンプ』に参加した子どもたちや直島の子どもたちが、私が出会った子どもたちの二の舞にならないように、今からできることが何かある。一緒にやっていきましょう。

協力者　三重の方が、学校と是々非々で向き合ってやって来られた話を聞いて、関係が対等な気がして素敵やなと思った。無くしていかないといけないということは分かっているけれど、結果として、『水平社宣言』から100年以上たった今も残してしまっている。

これまでの発言を聞いていて、自分も何か言いたくなったというひとがいればどうぞ。

兵庫　小学校区に人権啓発の委員会がある。学校の先生、地域住民、保護者が委員をしている中で、それぞれが分かっているようで分かっていないと感じる。それぞれちょっとずつ認識のずれがあるように感じている。話をしてみて、時間をかけて理解し合うことが必要。大人がまず絡み合って、子どもにその姿を見せたりしながら子どもと関わる。自分ができることをやっていきたいと思っている。

佐賀　学校同和教育は多感な時期に子どもに寄り添っていくこと、社会同和教育は生涯を通じた学びの機会を住民に提供していくこと。確かに言えることは、学校同和教育と社会同和教育がセクト主義であってはいけないということ。同様に、学び直しも大事。大人が常識だと思っていることの中にも、賞味期限が切れた常識もある。社会同和教育が学校同和教育のことをよく理解しながら同一歩調で歩んでいかなければいけない。私にできることとして、先生方に近づいていくことはできると思うし、先生方から学ぶことはできると思う。同僚と一緒にそれをやっていきたい。

協力者　互いが歩み寄るとか近づくというイメージよりは、差別を無くすという目標に向かって、社会が何ができるか、学校が何ができるかというように、それぞれが自分の役割をきちんと自覚して、同じゴールに向かって行く、そういったイメージではないのか。

兵庫　教員を退職して10年が経つ。今、手伝いをしている小学校では、6年生が『私の人権宣言を作ろう』というテーマで授業をしており、参観した。若い先生が、兵庫県の副読本「ほほえみ」を元に、水平社のことについて果敢に取り組んでいた。人権教育協議会学校教育部会の中の授業研究会に参加している。すべての先生方がそれぞれの学校に行き、授業の感想を言う。45年近くの取り組みになる。学び続けることが大きな力になる。今日の感想を1つ言うと、直島町は幼少中一貫教育ができていて恵まれた条件が整っている。連携してやっていこうという取り組みはまさに、人権教育、同和教育だと思う。思い切った取り組みをしていくことが大切だと感じた。

三重　元教員。本質的には緊張感のある話が好きだが、今日の感じだとそれは明日に回さないといけないということが分かった。

香川県の実践は、過疎化の中でできることをやろうとして取り組んでいる。素敵だと思う。でも、討議課題や、「未来につながるしまづくり」「人権確立を目指すまちづくり」というテーマが掲げられている。直島では、どうやってそういうまちづくりをしているのか。例えば,何十年も続いている英語教育で観光地としてやって行こうという取り組みが、「自分と違う人を見た時にドキッとしてしまうけれど、関わってみると案外面白かった。だから人のことを知るのは大事やなと思いました。単学級である私たちも人のことを決めつけたりせずにもっと知りたいと思いました。」というようにつながっていくことが真の意味での人権教育だと思う。郷土料理教室では、料理の紹介だけでなく、「どうして日本に来たの？」「どんな暮らしをしているの？」といったような話の中から、「こんなことがしんどい」といった言葉を拾っていくことの方が、安心して暮らせるまちづくりにつながる。そういった辺りも知りたかった。そういったことが学校での学びと連携していくことこそが同和教育ではないのかなと思った。

かつての勤務校の教え子の青年たちと一緒に活動している。彼らは、中学校の人権学習と絡みながら子どもたちに話をしに行ってくれている。今の子どもたちが学校を卒業した時にその活動に入りたいと言ってくれるような取り組みをやっていくぞと思っている。これからもそういったことを広

めていきたい。

佐賀　今日のレポートに言葉を添えたい。私はこんな風に言った。「隣保館、児童センターそして支部は学校、家庭、地域を1つにつなぐだんごの串です。ワイワイキャンプはだんご三兄弟です。」私たちは決して馴れ合いではありません。膝を常に突き合わせてという意味でのだんご三兄弟です。速水けんたろうお兄さんもこんな風に言っています。「ケンカする時もあるよ」以上です。

－1日目のまとめ

総括と言いながら、討議の課題に沿うような形で、発言自体を関連付けて進めることが自分としてはできなかったと感じている。だが、私たち一人一人が、「自分はどうなんや」というところを問い直さなければいけないということがいくつもキーワードとして出された。明日も2本の実践報告の後、計4本の報告で提案されたことや話し合われたことを元に、この2日間で、自分たちの分散会ではこういうことを確認しましょうというところまで到達したい。皆さんのお力をお借りしたい。よろしくお願いします。進行の中の、総括への振りで、伴さんに対して、失礼な言い方をしてしまったことについてお詫び申し上げる。

－報告3－⑧

本当の自分を生きる

～自分の中の差別からの解放～ （三重県人教）

私は、11年間公立小・中学校の教員をしていた際、差別の現実から深く学び、被差別の立場におかれた子を中心に据え、反差別のなかまづくりに取り組んできたつもりだった。

しかし、教員になって8年目、同和教育推進協議会のＹさんから、「解放されていない先生に教えてもろても、子どもたちが解放されるわけない」との指摘を受けた。後日、Ｙ さんからもらった手紙を読んだ時には、これまでの私の教育を否定されたと感じた。文面に書かれていた「K（報告者）さんのなかに、『部落差別の現実』がある」との言葉の意味が理解できなかった。1か月ほど考え続ける中で、特別にしたり、蓋をしたりする自分が見えてきて、「部落の人」という分けた見方をする自分の中に「部落差別の現実」があることに気づいた。

同時に、全国人権・同和教育研究大会実践報告協力者の Ｓ さんとの出会いがあった。Ｓ さんからのアドバイスをもらいながらレポートの検討をする中で、Ｙ さんの言葉から、自分が気づいたことについて話した。そして、「差別はまわりが作っとんのや」ということは、つまり、「性別違和のある自分も、摂食障害の自分も・・・自分が悪いんじゃないんや」ということに気づいた。心が開けた初めての体験だった。

そのような体験の中で、「Ｓ さんになら話せるかもしれない」という気持ちが芽生え、これまでずっと隠してきた摂食障害のこと、性別違和のことや苦しかったことを打ち明けた。Ｓ さんは「Kちゃんは恥ずかしいことと言うけど、私は全く恥ずかしいことではないと思うよ。それだけは言いたいと思った」と言ってくれた。それ以降、Ｓさんの前では、徐々に隠すことなく過ごせるようになり、11年続いた摂食障害が治った。

しかし、仕事が思うようにできなくなり休職することになった。休職中、幼少期から勉強も運動も完璧にこなし、周囲から評価されることで自尊感情を満たそうとしてきたことや、家族や周囲の人に、弱みや心の痛みを出さず、「できる自分」を装ってきた自分について考えた。そして、「できる自分」」「女である自分」を演じてきたことで摂食障害になったのだと気づいた。Ｙさんや Sさんとの出会いによって自尊感情を徐々に取り戻し、摂食障害の症状が消えていったと同時に、完璧な人間を保つことができなくなり、仕事ができなくなってしまったのだと思った。

そのような時に出会ったのがNPO法人LGBTの家族と友人をつなぐ会のUさんだった。出会ったその日に、今の状況や性別違和がある自分について打ち明け、Uさんの活動についての話を聞いた。月1回の会に参加し、その後スタッフになり、今年度6月に理事になった。

会の活動の中でトランス男性高校生の Ｒ さんに出会った。Rさんは、男女別の制服しかない高校への推薦入学が決まり、戸籍上の性別に合わせたスカートの制服で入学式に臨む覚悟をしていたが、入学式が近づくにつれ苦しくなっていた。そのことを聞いて、多くの人に連絡を取ったり、高校に何度か交渉をすることで、Ｒ さんが自認する性の制服を着ることができるようにしてもらうことができた。教え子の助けを得て男子制服も入手できた。

私が現在働いているスクールでのこと、父親が韓国人だと打ち明けてきた子どもに対して、興味津々な様子で質問をすることで、在日コリアンに対しての偏見を持っていないように見せようとする自分がいた。また、発達障害の生徒を含む数名で学習をしている際には、発達障害の生徒が音をたてたり、思ったことをストレートに発言したりした時に、周囲の子どもたちの表情を気にする自分がいた。ある日、その生徒が、「俺だってたまには先生の役にたちたいんよ」と言った。その言葉の裏には、「自分は役に立たない」「迷惑ばかりかけている」という気持ちがあるのではないかと考えた。周囲がその子にそう思わせているということだと思った。

性別違和がある人たちが集まる場に行った際、体の性が男性の人が化粧をして女性の格好をしているのを見て、「髭も見えるし、声も低いし、かつらやし、やっぱり男に見えるよな」と思った。こういった自分の中の偏見や差別心が、被差別の立場の人を本当の自分でいられなくさせている。

そのような差別意識に囚われている自分を振り返ると、未だに自分で自分を差別していることに気づく。でも、そういった思いを、今は、人に語ることができている。

たくさんの出会いの中で、自分が変化していっていることを感じる。Y さんとの出会いをきっかけに自分の差別性に気づき、認め、語るとともに、差別はまわりが作っている、被差別の自分は何も悪くないと思えるようになったこと。Sさんに一番言いにくいことを打ち明け、本当の自分で生きられるようになったこと。Uさんの社会に訴える行動や差別への抗いに触れ、共に行動できるようになったこと。

Yさんの手紙の中に、「差別の現実を社会の問題として捉えられていない」という指摘があった。当時、子どもたちのしんどさを個人の問題として捉えており、そのような社会を作っている一人に自分がいることの自覚が無かったため、しんどさの背景にある部落差別をなくす行動、社会を変えるための運動をすることができなかった。だからこそ、今、性の多様性について人前で話をする時には、必ず部落差別の話や加差別の立場の自分を話している。これからも、本当の自分を生きさせないようにしているのは私であるということを忘れず、誰もが本当の自分を生きられる社会を作るために、自分自身を語り続けていきたい。

－主な質疑と意見－

兵庫　個人の問題としてではなく、社会の問題として考えることが必要。気づくのは個人であるが、その気づきを社会にどう訴えていくか、どう働きかけていくかということが無いといけない。

三重　本当の自分を生きられないようにしているのは自分自身。

報告者　LGBTQについては被差別側だけれども、その他の課題については加差別側にいる。加差別側の属性の方が明らかに多い。そのことに気づいていないといけないと思っている。

大分　自分もLGBTQの立場。家族にカミングアウトできていない悩みを抱えている。

報告者　ずっと家族にカミングアウトしないでいた。2年位前、親に LGBTQ であることを話した。父は、「好きに生きて行ったらええやん」と言ってくれた。母は、何も言わなかった。何と言ったら、私を傷つけないかを考えていたのだと思う。摂食障害については、これまで親に話してはいなかった。今回は、今の自分を伝えたいと思った。今、会場に来てくれている。

三重　小学校教員。「子どもたちの心が解放されるような教育をしていきたい」と話した時、保護者から「分かってへんなあ」と言われたことがある。自分の心の中にフタをして教育をしてきたと気づいた。報告者がLGBTQであることを話してくれた時、「何で言ってくれたん？」と訊ねた。報告者は、「話しても私のことを変な目で見ないと思ったから。職場の人にカミングアウトしたのは、研修部に所属していて、性の多様性についての研修をする時に、どういう自分で臨めばいいのか分からなかったから」と話してくれた。

三重　報告者から相談を受けた時、「一人称で書け」と言った。

三重　元教員。最初、一人称で語るのが何でまちづくりなのかと思った。教員を辞めて、新しい所属になり、離れた場所から見える良さ、もどかしさ、離れているからこそできることがあると知った。今、同和教育に取り組んでいて、教員でいる時よりも明らかに楽しい。そういった楽しいところから、まちづくりについて考えていきたい。教員の頃は、自分が認められたいという目的で同和教育をしていた。自分が子どもたちを育てなくてはいけないと思っていた。それは差別を無くすことにつながっていなかった。今は、大切なのは、子どもたち1人1人が語ることの中にあると思っている。

報告4－⑦
つながりあって幸せに生きる
～不登校・ひきこもりの支援を通して学ぶこと～　（兵人教）

退職した年、仲間3人と共に、教職員時代に出会った不登校の児童生徒に連絡を取り、中学校卒業後の様子について聞いた。約半数が高校や就職先で挫折して、生きづらさを抱えてひきこもっているという実態を知った。気にかけながら、一緒にやっていくことが大事だと実感した。何とかしたい、自分たちにできることが何かあるとの思いから、2011年11月に不登校・ひきこもりを支援する「ドーナツの会」を有志で発足し、相談場所と居場所を開設した。

40年前、阪神地区の小学校で1年生の担任をしていた。学級に K ちゃんという子どもがいた。偏食で給食指導が大変だったが、食べられるものを増やそうと思い声掛けを続けた。9月から K ちゃんは登校を渋るようになった。母親の「毎日お弁当を作るのが大変」という声を聞いて、毎朝 K ちゃんを迎えに行くこくことにした。当時は、学級全員が揃うことが大事だと思っていた。翌春、異動で但馬に帰ることになった。そのことを知った K ちゃんは、「私を放って行かんといてちょうだい」としがみついて訴えた。「しんどい時は、いつでも連絡して」と伝えて但馬に帰った。高学年になって、K ちゃんはまた不登校になったと聞いた。ある日、K ちゃんから電話をもらった。K ちゃんは、「中学生になりました。私の居場所はありません」と話した。その言葉を聞いて、気になる子やメッセージを送って来てくれる子どもを決して放ってはいけないということを実感した。K ちゃんは、私の教育の原点になっている。

「みんなでつながりあって生きていこう」という思いを込めて「ドーナツの会」と名付けた。この世に

誕生したすべての命が、決して孤立することなく大切にされ、自分の力を発揮して、幸せに生きていくことができる包摂型社会の実現が会の目的。

不登校の児童生徒数は年々増加しており、2022年度は29万人を超えた。不登校からひきこもり状態への移行防止のためには、学童期から思春期にある子どもに対しての早期支援が求められる。2019年から2023年の4年間で、ひきこもり全体の数は1.3倍に増加した。中でも40歳以上の人のひきこもりが多く、期間の長期化に伴い8050問題が生じている。ひきこもり状況になった主な理由として、小・中・高校、大学時代の不登校が半数近くを占めており、不登校を長期化させないための早期対応が求められる。

民生委員さんから、25 年間ひきこもっている息子さんが居るとの報告を受けて訪問した。まさに『8050問題』の状況。親や当事者に自己責任だと思わせている社会、自分達で何とかしなければいけないと思い、抱え込んでしまっている現状がある。そうではなくて、『OSD』だ「親が死んだらどうする」ではなく、「親が子どものために、生前にできることを一緒にやっていきましょう」ということを伝えている。ドーナツの会の利用者が、「自立という言葉が嫌いだ。」と言っていた。誰でも、自分一人で何でもできる訳ではない。頼れる人を増やすのが自立だと思っている。

誰でも、安心して過ごせる居場所と出番が必要。まず、自分のことが大切にされていると感じることから始めていけたら良いと思う。社会を変えていくのは当事者の力だと思っている。ドーナツの会は3人のスタッフで活動を始めた。現在は45人のスタッフがいる。

一人一人の不登校やひきこもりの状態に合わせた本人支援と家族支援を継続的に展開し、本人と家族が安心して元気を回復し、それぞれの目標に向かっての一歩を踏み出すことを目指している。安心して自由に過ごせる居場所と生きづらさを抱えた人や社会から孤立している人、家族が支援者とつながることができる相談活動が「ドーナツの会」の取り組みの柱になっている。

「ドーナツの会」では、毎日、手作りのランチを提供している。「一緒に食べることは一緒に歩むこと」と考えている。また、6年前から、但馬初の「ドーナツこども食堂」を月に2回実施している。地域住民や企業から提供してもらった新鮮な食材を使ったランチを安価で提供しており、多様な世代の地域住民の交流拠点となっている。「ドーナツの会」を利用している若者たちが、食堂のスタッフとして受付や野菜の販売、接客等、役割を持って働き報酬を得る中で、少しずつ自信を回復しており、食堂を通して地域とつながっていく様子を見て、温かい支援の輪の広がりを実感している。

2021年にひきこもりに特化した就労継続支援B型事業所「ドーナツワークス」を、2023年には就労移行支援事業所「ドーナツステップ」を開設した。本人の体調に合わせた仕事を通して心のケアを行い、生活リズムを整えて、仲間と共に歩む体験を積み上げながら社会的自立を目指している。

「ドーナツの会」設立から12年、この間の相談登録者実人数は313人、現在の支援継続者は168人。民生委員さんや隣保長さんなどの地域の身近な方からの声掛けで支援につながったケースもある。「一人一人に切れ目のない支援を」と願いながらも連絡が途絶えることもあり、再度連絡してつながる努力を続けている。社会には、ひきこもりを自己責任とする風潮が根強くあり、家族も隠そうとする現実がある。そのため、本人は世間の視線に怯え、自分を責め、社会から孤立していく。生きづらさを抱えた人たちは、きちんと向き合えば、時間がかかっても少しずつ動き始め、自立に向けて歩むことができると信じている。命の重みは平等であり、誰もが幸せに生きる権利を持っている。誰もが自分の力を発揮できる寛容な地域になればと願っている。（ドーナツこども食堂紹介の動画上映）

自分が大切にされているという経験がエネルギーになる。子ども食堂の正面には、不登校で「ドーナツの会」に通所していたAさんの『ひまわりの絵』が掛かっている。Aさんは現在大学で絵を学んでいる。20年間ひきこもっていたBさんは、10年前に地域の人から声を掛けられて、地域の祭りや草刈り等の行事に参加し始めた。B 君が先日、「話がある」と言ってきたので聞くと、「実は、お父さんが癌になった。僕は覚悟をしなくてはいけない。」との事だった。やっとB君が頼って来てくれたと感じた。今は、「ドーナツの会」を居場所にして、「ドーナツワークス」で毎日仕事に励んでいる。そんなBさんの周りには、多くの理解者がいる。私たちは、若者たちとの出会いに感謝しながら、その人らしい歩みや生き方に、日々励まされている。

－主な意見と質疑

三重 小学校教員。担任をしている子どもが9月中旬から不登校になっている。母子家庭で、施設に入所する祖母との3人家族。母親は地域の中でつながりを作れておらず、「この子の心のよりどころは私しかいないので、強く言えない。この子との関係がこじれてしまったら、この子の居場所がなくなる。」と言っている。子どもの自立のために、家庭と学校の連携が重要だと感じているが難しさも感じている。「ドーナツの会」ではどのような取り組みをしているのかを教えてほしい。

報告者 A 学校の職員の研修に呼んでもらっている。学校の核になる教頭先生が、「ドーナツの会」の取り組みに関心を持ってくれるように声掛けをしている。今年も3回呼んでもらった。その中で、不登校の子どもがいた時に、「学校では家庭に入って、母親の支援まではできない」との話があった。そういう時に、「ドーナツの会」に声を掛けてほしいと伝えている。

報告者 B 関係者が早くタッグを組んで支援体制

を取ることが大事。「ドーナツの会」には『親の会』がある。安心して辛さを出せる場所、親が自分の話をする場所になっている。親が『振り返り』ができるような支援、子どものありのままを受け入れられるようになるための支援をしている。親も1人の人間、子どもも1人の人間。親が楽になれると、子どもも楽になれる。

三重　親のしんどさの背景には、被差別部落にルーツがあるとか、外国にルーツがあるとか、親も不登校経験があるといった色々な背景があると思う。そこも探りながら取り組みを進めていけたら素敵だと思う。

兵庫　教員をしている。不登校の子どもがそのまま社会的引きこもりになっていくケースが多いと聞いている。スタッフがアウトリーチを行う際、最初に訪問する人がどのような勉強をして、どんな方法で訪問を行っているのかについて知りたい。経験値だけでは行き詰まる。

報告者Ａ　無理やりはいけない。地域の同僚などの身近な人からの声掛けが効果的だと感じている。精神科医やカウンセラーが「そっとしておきましょう」と言うことがあるが、放っておくのではなく、どんな過ごし方をするかが大事。「ドーナツの会」では、本人の思いを大切にしている。「どうしたい？」と聞いたら、「弟が大学に行く夢をもっているから、僕も勉強がしたい。」と言った子がいた。その子の思いをかなえるために、「ドーナツの会」で勉強ができる仕組みを作った。

報告者 B　「ひとぐすり」という言葉がある。親ではなくても、親のような愛情のある人たちもいる。どんな人と出会うか、どんな仲間がいるかが大事。長期間ひきこもっていた人で、「ドーナツの会」に来て、そのまま仲間と「ドーナツワークス」で働き始めた人もいる。学び直しも行っている。診断名をつけられて、医師から変わらないといわれた人でも、本人のペースに合わせて寛容な世界で人を育てると必ず変わることを実感している。

協力者　スタッフのスキルを高めるためにしていることがあれば紹介してほしい。

報告者 A　県の委託を受けた事業なので、スタッフは、神戸看護大学の船越先生の指導を受けている。「家庭訪問の仕方はどうしたらいいでしょう」といったような相談を持っていくと、簡潔に答えてくださる。船越先生は、「学校とか職場の側に問題がある。何故、その子が適応障害だといって問題にするのか。」といつも言われる。時間を共にすることで周囲の心が変わってくる。

　コープの店長さんが「ドーナツの会」来て、「困ったことは無いか」と気にかけてくれる。「ドーナツの利用者がコープに体験学習に来てくれたから、うちのスタッフが育てられている。こちらがありがとうと言いたい。」と言ってもくださる。こんな企業が一つずつ増えていったらいいなと思っている。

協力者　フィルターを通してその人を判断するのではなく、その人自身に向き合って、どんなサポートをしたらエネルギーが蓄積されていくかを皆で考えていくことが必要ということだと思う。ひきこもりは、不適応ではなく、その人が精一杯、今の環境に適応している姿。身を守るための、人として正常な反応として捉えていきたい。誰でも、安心して過ごせる居場所と出番が必要。まず、自分のことが大切にされていると感じることができる場作り、地域づくりから始めていけたら良いと思う。

　2日間4本の実践報告と質疑を終えさせていただいた。5人の実践報告者と会場の皆さんに感謝。

－総括討議

兵庫　昨日と今日の質疑の中で、学校同和教育で学んだものが社会の中で生かされていないのではないかという意見があったが、学校同和教育も社会同和教育も方向性は1つ。それぞれの立場があって、それぞれができることをやっている。意見の対立も1つの歩み寄りの手段だと捉えたい。大人の学びが子どもたちに伝わってくる。1人1人の力が混ざり合って地域を動かしていく力になる。そういった意味でも、まちづくりは人づくりなのだと思う。今日の三重県人教からの報告も、個人のことではあっても、しっかりとまちづくりにつながっていると思った。

三重　教員初任者を指導する立場。三重人教の報告者が、全同教三重大会で実践報告をされたころから一緒に仕事をさせてもらっている。今、3年生学級に吃音の児童が居り、初任者の担任が、その児童のことを取り上げた授業がしたいと相談してきた。報告者が小学校教員をしていた時に、吃音について取り上げた授業をしており、その中で、「誰々が嫌な思いをするのはその子に問題があるのではなくて、自分たち周りに問題があるのとちがうか」とスパッと言っていた。報告者は、周りの意識がその子にしんどい思いをさせているという視点を持ってずっと取り組みをしていた。他にも、『いろいろ家族』という絵本を使って授業をしていた。まず、対話することが大事だと思う。学級で交わされる話がその学級の中だけで終わったらもったいない。勤務校では、始業式とかにチョコッとはめ込んで、報告の場面を作り、子どもたちからの発信に対して、「私はこう思う」と返していけるような場面を作っている。「それおかしいんじゃないの」といったように思ったことを言える空気が、この小学校における子どもたちにとっての社会だと思っている。吃音について取り上げた授業の時に、本人が、「僕自身も持っている」と話をしてくれた。担任が、「言えたのは、聴いてくれる皆が居たからかな」と締めくくっていた。まだまだ甘いところもあるが、ていねいに取り組んでいくことが大事だと思っている。

　同推教活動には被差別部落以外の人もたくさん関わっていて、「部落出身と言うけれど、私はそんなこと関係ないと思っている。」といったようなことも言える環境がある。「関係ないってどういうこ

とやろ？」といったやり取りができている。「思っている時や言いたい時に言ったり、聞いたりできることがウチの地域ではできていいよね」と言っている。その現場に子どもが立っていけるような機会を通じながら取り組んでいくことが社会教育としてのまちづくりにつながると感じている。

三重　小学校の教員をしている。離婚して母子家庭。20年前、地区懇談会で、「地区の者を差別するもんがおったら許さへんぞ」と言った人がいた。後日、その人に、自分が長い間抱えていた思いを聞いてもらった。「現在30歳になる娘が、子どもの頃、『サッカーがしたい』と言った。女の子らしくしてほしいとの思いから、娘の願いを受け入れられず「あかん」と否定した。あきらめきれない娘は家の庭で一人でサッカーボールを蹴っていた。女の子らしい服装をさせようとした時には「スラックスをはきたい」と主張した。黒や紺色の服を好んだ。そんな娘の姿を見ていて、娘のありのままを受け入れることができず、かわいそうな思いをさせたと思った。ずっと抱えていた辛い思いをその人に聞いてもらい心が解放されていった。

三重　元校長。以前、参加した全同教で、「学校教育の中で見えてきたものを社会教育に生かすことが大事だ」と言っていた。部落問題は、「作られたものであること」「今、差別を無くすためにしていることについて」「自分が無くしていけることについて」正しく理解することが重要。一人称で語れる主体性があってこそ、見えて来ることがあるのだと思っている。

福岡　元教員で現在は市議。自分を語ることができるのは、この人だったら受け入れてくれるという実感が持てるから。自分の周りで、この人だったらと思える仲間を作っていく、そういった1つ1つの積み重ねがまちづくりにつながっていくのだと思う。

三重　「楽しくなければ学習会に人が集まらない」との発言があった。私は、人が解放されていく姿を見ていると『楽しそう』と感じる。自己が解放されていくことの楽しさと差別を無くすこといの楽しさは双方向だと思う。

三重　人権啓発担当17年になる。差別を語るときに2つのパターンがあると感じている。「誰かがこんなことを言っていた」「昔からそう言っている」といったように、自分を外に置いて語るか自分を中心に置いて語るかのどちらかだ。人権啓発は、『知識』と『意識』の2つが重要。どちらが欠けていてもいけない。今、自分はどの位置に立って語っているのかを常に意識していなくてはいけないと思っている。

－分散会まとめ

2 日間の討議では、反差別の社会をどう作っていくのか、誰が作っていくのかということが様々な観点から繰り返し語られた。

一本目、佐賀県からの報告では、『ワイワイキャンプ』という取り組みで、地域の様々な団体との協働の中で交流と対話が生まれ、出会った子どもたちが、これまで関係の無かった大人に対して「〇〇先生や」と声を掛けてくれるような関係性が生まれたとの報告があった。

フロアから、三重県の方が、「地区外の人の部落問題の認識がどう変わったのか」との質問が出た。直接出会う仕組みを作ること、一気に解消していこうとするのではなく、少しずつ、でも確実に差別の解消に向けた出会いを作りだすことの価値が確認された。

2本目、香川県からの報告では、固定化されやすい集団の中で、幼稚園から中学校まで過ごしてきた子どもが高校進学を機に島外に出た時に、その子らしく生きていく力を積み上げるために英語教育に力を入れているという報告があった。フロアから、幼少中一貫教育の中で、集団が固定化される課題があるからこそ、温かい人間関係を紡いでいく取り組みや子どもたちの人権感覚を耕すような取り組みが重要になってくるのではないか。英語でのコミュニケーションを通して、今までは相手のことがよくわからなかったけれど、話してみたら少し分かった気がするという実感は、これから先、子どもたちが様々な偏見と出会った時に、「それほんまなん？まず相手のことを知ることが大切じゃないの？」といったように乗り越えていける力につながるのではないかといった意見が出された。「未来につながる島づくり」とは、「差別のない未来につなげていく実践」であることを皆さんと確かめ合うことができた。

3本目、三重県からは、部落差別の解消という課題に対して、あなたはどこに立つのですかと突き付けられることで、自分の中にある差別性に気づき、加差別の側面を意識していったこと。さらに、差別はいけないと教え込むものではなく、差別のおかしさを子どもたちと一緒に考えていくことが重要だと感じ、性別違和のある自分の生きづらさにもつなげて捉えられるようになっていったという報告がなされた。

フロアから、「差別は加差別側の問題だとしながらもその中に自分を入れているのは何故ですか」また別の方からも、「一人称で語ることが何故まちづくりなのですか」との質問が出された。差別を無くしていこうとするときに、差別はいけないと指摘するのではなく、差別の不合理さ、おかしさを皆で考えていく必要がある。その皆の中にもちろん自分も入っている。自分も考える人達の中に居るという認識を持つことの意味が確認されました。

4本目、兵庫県からの報告では、引きこもり支援活動を通して、関わる人たちがそれぞれエンパワーされる報告がありました。ともすれば、自己責任論で語られることが多い不登校、ひきこもりの問題ですが、誰しもが今の自分でいいんだと思える社会を実現することの大切さと、不登校、ひきこもりを、学校や社会のありようへの異議申し立てとしてと

らえ、学校をはじめ周囲の私たちがこれまでの実践の問い直しを求められていることに気づくことの必要性について確認しました。さらに、学校との連携について話が出された時に、学校だけで課題にアプローチするのではなく、周りにある様々なリソースをうまくつなげて本人や家族にアプローチしていくことの大切さが語られました。
2日間の総括討議の中で、繰り返し、学校和教育と社会同和教育が結果として分断されてしまっている状況にあるという現実に対して、差別を無くすという未来に向けて、自分はいったい何をするべきなのかを私たち一人一人が問い直す必要があるということが発信されました。

昨年度、全同教奈良大会の直前に、かつての教え子から連絡があり、「今付き合っている子がいて、お互い結婚も考えている。自分が育った部落のことが大好きだし、打ち明けたいと思っているけれど・・・」といった悩みを打ち明けられた。28歳の若者が、何故未だに心を痛めないといけないのか。何故、互いに大好きだという仲なのに苦しまなければいけないのか。それは今も差別があるから。先達たちが歯を食いしばりながら差別を無くすための取り組みを積み上げてきたにも関わらず、結果として差別を受け継いできてしまっている。差別を無くすための取り組みをしないということは、乱暴な言い方をすれば、差別を拡大することに加担することになるのではないか。差別を無くすための取り組みに自分が関わらないということが、次の世代に差別を『引き継ぐことに加担するということを私たち一人一人が問い直す必要がある。市内の教員の2年目研修を担当しているが、寝た子を起こすな論にからめ取られている人が増えている気がしている。大前提として、差別を無くすつもりのない人は寝ない。最近は差別の実態が見えにくくなっている。ネットの世界では、バンバン起こされ続けている。見えにくくなっているが、差別は厳然として存在しているのが今の差別の現実。差別の現実から何を学び、その解消のために今の自分には何ができるのか、何をするべきかを一人一人が考えていくことの重要性が確認された分散会だった。

最後になるが、教員も行政も、まちづくりに携わる立場も、差別を無くすことができる仕事だと思っている。この場で確認されたことをそれぞれの地に持ち帰って、学校教育や社会教育の取り組みの中でこんなことにつなげた、こんなことを始めてみたということを来年のこの場に持ち寄って再度確認をしたいと思っている。そうした取り組みを積み重ねることが、反差別の未来につながる。明日から、それぞれの地で、共に頑張っていきたい。尚、相談のあった彼は、今年3月結婚して、幸せに暮らしている。